これからの葬儀を考える

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、これまで「葬儀」についてさまざまな視点より調査・分析を行ってきました。その中で問題の中心となってきたのは、「社会状況の変化」が葬儀や墓にどのような影響を与えたのか、そして急激に変化する葬儀や墓に対して私たちはどのように対応すべきなのかです。近年、「葬儀不要論」や「直葬」などの「僧侶を介在しない葬儀」が取りざたされるように、「葬儀」の場における僧侶の存在そのものの必要性が疑問視されるようになってきましたが、変化の著しい現代日本の葬儀において、僧侶が介在する意義はどこにあるのでしょうか。

総合研究所では二〇二二年六月に、現代日本の葬送儀礼、特に僧侶介在の意義について専門に取り扱っておられる、大谷大学真宗総合研究所東京分室ＰＤ研究員の磯部美紀氏を招聘し、「葬儀における僧侶介在の意義―特に法話を中心として―」と題して研究会を開催しました。今回は研究会の内容を当研究所にてまとめて報告いたします。

一、僧侶の役割の見直し

日本における伝統的な葬儀は、イエや地域共同体を中心に営まれ、そこに僧侶がかかわるかたちで継続されてきました。当然、僧侶は「葬儀」という儀礼を営むための欠かせない存在であり、「葬儀」に僧侶が介在することは「当たり前」であったといえます。しかし、戦後徐々に、これまでのイエや地域共同体

が解体され始めると、葬儀業者が葬儀を主導することになり、加えて樹木葬や家族葬、「僧侶を介さない」直葬等のさまざまな「新たな葬儀」のあり方（選択肢）が登場しました。近年では、「葬儀不要論」など僧侶を介する葬儀そのものへの批判が話題を呼んだこともあるように「僧侶を介在しない葬儀」も増加傾向にあります。

磯部氏によれば、現代の葬儀は「遺族が消費者目線によって形態を選択する」ものであり、葬儀を執行する「意味」そのものも個々人に委ねられるものとなっているといいます。その結果、現代の葬儀において僧侶は、遺族が必要とした際に参加する、消費者が選ぶサービスの一つになってしまったということです。しかしながら、依然として「僧侶が介在する葬儀」が大勢を占めていることも事実です。

磯部氏は、現代でも「僧侶が介在する葬儀」が選択されている背景には、葬儀に僧侶が介在すること自体に大切な意味があり、特に僧侶が行う「法話」に重要な役割があるのだと指摘されました。

二、法話への期待

では葬儀において僧侶が行う法話の重要な役割とは何でしょうか。まず、磯部氏は法話が重要な役割を持った背景に「僧侶の役割の見直し」があると述べられました。文化人類学者の波平恵美子氏は、規模の縮小化の進む現代の葬儀においては、僧侶からこれまでは説明しなくても納得されていた葬儀の形に「意を添えていくことが必要」であると指摘しています。[i] 先述のように、近年までは葬儀に僧侶が介在することは言うまでもない自明のことでした。加えて、葬儀に関する慣習や意味についても同様に、イエや地域共同体の中で葬儀が自然と執り行われ、受け継がれてきた際には、「葬儀はどのように行うか」「何のために行うか」といったことについては、親族や有縁の人からさまざまなかたちで伝えられていたからこそ、疑問とならなかったのではないかと考えられます。しかし、現在では今まで説明不要で行われてきた葬儀に、これらの説明が求められ始めました。磯部氏は、その説明の役割を果たすことができるのが「法話」であると主張されました。

また宗教社会学者である櫻井義秀氏は、葬儀における僧侶の法話には「二人称の死」を経験した遺族に、慰めと癒やしの側面があることを指摘されています。[ii] このように現代日本の葬儀において「法話」は、さまざまな役割を果たすことができると考えられます。

以上のことから磯部氏は、法話の役割を見直し、「上手く」活用することによって、僧侶が葬儀に介在するさまざまな意義を見出していくことができるのではないかと述べられました。つまり、私たち僧侶が仏徳讃嘆の内容として行っている「法話」は、社会学の視点から見れば、現代の葬儀において多くの意義

を持つものと評価することができるのではないかということです。

三、葬儀における僧侶の三つの役割

磯部氏は続いて、葬儀における僧侶の役割について社会学における研究成果を整理し、以下の三点を提示されました。さらに、新潟県旧新津市（現新潟市秋葉区）と岐阜県西濃地域における聞き取り調査（上記参照）の結果を踏まえ、具体的に僧侶のどのような行為が葬儀の場において重要な役割を果たしているのかについて述べられました。

①「型」の体現者（儀礼論）
②死者の「記憶」を共有（記憶論）
③「死者と生者」としての関係性の再構築（秩序形成論）

調査概要

- 新潟県旧新津市
  真宗大谷派K寺住職による葬儀（故Tさん・故Yさん通夜）の参与観察、
  K寺住職と門徒（故Tさん遺族、故Yさん遺族）の聞き取り調査。
- 岐阜県西濃地域
  真宗大谷派寺院の住職5名（A～E寺住職）、
  葬儀社2社（α、β葬儀社）、死別経験者Iさんの聞き取り調査。
- 両地域では、地縁、血縁による共同体が緩やかに残る。
  門徒と手次寺の緊密な関係の上で葬儀。

■「型」の体現者

僧侶が読経や法話を行うことは、葬儀を構成する「型」を体現していると認識することができます。すなわち、葬儀の場で僧侶が儀礼を執行すること自体が、「葬儀」を構成する一つになっているということです。遺族や葬送業者へ行った聞き取り調査からも、葬儀の場で僧侶が儀礼を執行することで、葬儀の場が整い、遺族に「故人をきちんと弔った」という安心感を与える役割があることがうかがえると磯部氏は指摘されました。

■死者の「記憶」を共有

また僧侶は、葬儀の場において故人の「記憶」を参加者と共有するという新たな役割も担っています。磯部氏は、葬儀における法話の内容を分析することで、仏法を語るという「型」を実践するという要素と、故人の生前の様子を語り記憶を「共同

化」するという二つの要素より法話が構成されていることを指摘されました。伝統的な葬儀はイエや地域共同体によって営まれてきたことで、参加者たちが故人の思い出や関係性を語り合い、死者の記憶が自然と共有化されてきました。しかし、現代では「家族葬」などの「親密圏の葬儀」が一般的になり、「葬儀」の中で故人の記憶を保持する担い手も縮小化しています。その上で死者の記憶の共有化は、葬儀が現代の形態へと変化していく中で、抜け落ちてしまっていた部分でもあり、これに対して「法話」は、死者の記憶を参加者と共有するという本来葬儀にあったプロセスを補完することが可能ではないかと磯部氏は指摘されました。これは、葬儀の形態が変化したことにより僧侶の「法話」に新たな役割が加わったということができます。

そして、故人の記憶を参加者と共有するという法話の現代的意味は、個人化の進む葬儀を背景とする現代的ニーズに対する僧侶からの応答であると捉えることができるとも、磯部氏は主張されました。

■「死者と生者」としての関係の再構築

葬儀は、「死者と生者」としての関係の再構築とも捉えることができます。人の死によって、これまで生者であった者は「死者」となり、遺された生者は「遺族」という新たな関係性を再構築することになります。この関係性を構築する役割にも僧侶の「法話」は寄与していると考えられます。

遺族への聞き取りを行われる中で磯部氏は、死者との向き合い方に関する戸惑いの声を複数聞かれたそうです。それは、どれほど近しい人であっても「死別」という非日常的な局面の時には、一瞬恐怖を覚えたり、どのように向き合うべきかわからないといった切実な声でした。しかし同時に、そのような場面に僧侶がお参りすると「安堵する」もしくは「適切な触れ方を知っている存在」として僧侶を認識しているとの声も挙げられ

➤僧侶介在の3つの意味
①葬儀の「型」を体現して葬儀の場を整えることで
　遺族の安心感や弔いの実感の獲得に寄与。
②小規模化する葬儀のなかで「死者の記憶」の調整。
③「死者と生者」として関係性を再構築するための秩序観を遺族に提示。

➤僧侶は「より良い」葬儀実践のあり方を模索。
　時代状況に合わせて僧侶が自らの行為や意識を反省的に見直す。
　仏式葬儀に元来内包されていた特徴が現代日本の文脈で再認識される。

➤僧侶介在の意味は、僧侶、遺族、葬祭業者で認識に差がある。
　異なる思いを抱えた様々なアクターが同一の時空間を共にする。
　僧侶介在の葬送儀礼は、多様な意味づけや解釈に耐えうる力を含む。

たようです。これらを受けて磯部氏は、葬儀の場に僧侶が介在し、宗教実践を行うことで、遺族に死者への適切な触れ方（行動様式）、向き合い方を示唆していると指摘されています。また、僧侶は法話の中で「死は終わりではない」すなわち「故人は阿弥陀仏の浄土に生まれ、仏となっている」ことを伝えることによって、遺族に「死者と生者」としての新たな生活に秩序を与えるという役割も果たしているとも指摘されました。つまり、「法話」には葬儀を単なる故人との「お別れの場」にとどまらせないという役割があるとも考えることができます。

四、まとめ

磯部氏は、僧侶が葬儀に介在することについて三つの役割のあることを主張されました。そして現代日本において僧侶が介在する葬儀は、「法話」の役割を見直すことで、「故人の記憶を共有する」、「生者と死者としての関係を再構築する」といった多くの意義を加えることが可能であり、また多くの意義づけを加えることに耐えうるだけの力を持つものであると強く主張されました。

著しく変化する社会の中で、葬儀の様式が大きく変化する中で僧侶の役割も問われ続けてきました。そのような中で磯部氏の見解は、現行の葬儀を執行するうえで、「法話」の重要性を明らかにするものとして示唆に富むものでした。それと同時に現代日本においては僧侶が、儀礼や法話の現代的な意義を再認識し、葬儀という場で人びとと関わる中で求められていることに対応していかなければなりません。今後も、葬儀を行う意味とは何か、僧侶が果たす役割は何か、そしてこれらをどう伝えていくのか、検討を重ねていく必要があるように思います。

（総合研究所研究助手　西村慶哉）

i　波平恵美子「儀礼からみた葬祭の社会的意味」（曹洞宗総合研究センター編『葬祭―現代的意義と課題―』曹洞宗総合研究センター、二〇〇三年）

ii　櫻井義秀『これからの仏教葬儀レス社会』（興山社、二〇二〇年）